

第28話（16頁） 子ネズミのさんぽ

子ネズミがさんぽに出かけました。庭をぐるりとまわって、またお母さんのところにもどってきました。

「お母さん、わたし動物を2ひき見たわ。1ひきはおそろしくて、もう1ひきはやさしいの。」

母おやがたずねました。

「どんな動物だったか、話してごらん。」

子ネズミは言いました。

「1ひきめのおそろしいほうはね、ちょうどこんなふうに庭を歩いてるの。足が黒くて、とさかが赤くて、目はどんぐりみたいで、くちばしはかぎがた。わたしが通りかかったら、ぱっくり口をあけて、かた足を上げて、とっても大きな声を上げたものだから、わたしはこわくて足がすくんでしまったくらい。」

「それはオンドリよ」と母おやネズミは言いました。「オンドリはだれにも悪さをしないのよ。こわがることはないんだよ。もう1ひきの動物は？」

「もう1ひきは横になって日なたぼっこしてたわ。くびが白くて、足がはいいろでつやつやしてるの。自分で自分の白いむねをなめていてね、ちょっぴりしっぽをふりながら、わたしのほうを見ていたわ。」

母おやネズミは言いました。

「おまえはおばかさんだね、まったく！ だって、それがネコなんだよ！」

「この話から教訓を汲むとすれば、何だろうか。人は見かけによらない、人を見かけで判断してはいけない、ということかな。」

「事実を知らないと、本当の怖さは分からない。子ネズミはネコに食べられてしまうことを知らなかったんじゃないか。」

「それは知ってた。でも、見かけは優しい方の動物がネコとは思わなかった。」

「経験者の話は大事だ、とも解釈できるよ。子ネズミに限らない。だれでも、なんでもすべて体験できるわけではないのだから。」

「この話、楽しいというか、ストーリーがとても興味深い。最後にどんでん返しが待っているという印象だね。」

「メルヘンチックというか、ほのぼのした印象がある。」

「このお母さんネコ、子ネズミたちが外へ出る時も、特段の注意を与えた様子がない。例えば『赤ずきん』の童話とは前提も展開も違っている。」

「あそこにいる、あのネコなら大丈夫と、たかをくくったとか…やっぱり、それはないか。」

『だって、それがネコなんだよ！』という結びからは、日ごろも繰り返し、ネコには注意するように言っていたと読めるよ。」

「そうだとすると、愛情いっぱい、決して怒っている感じじゃない。軽くたしなめているみたいだ。」

「子どもたちには、この話をもとに絵を描いてみようよ、と持ちかけることもできるね。」

「オンドリとネコ、この2匹をほかの動物に置きかえられないか。あるいは、誰々ちゃんと誰ちゃんかな、と身近な友達に置きかえるゲームも成り立つんじゃないか。」

「そう思わせる紙芝居のような雰囲気、この話の特徴だろうね。」

「2匹の描き方も対照的だ。オンドリの描写は動きがあってとてもビビッドなのに、ネコときたら、横になってデレーツとしていてあまり動きがない。」

「オンドリは子ネズミの出現に驚き、慌てた。ネコは悠然としていた、という違いでは？」

「ネコの描き方は的確で、『ちょっぴりしっぽをふりながら』とか、よく習性を知っている、と思った。」

「ネコはお腹いっぱいだったのかな、子ネズミを見かけたぐらいでは動こうともしない。」

「子ネズミがもっとチョロチョロしたら、飛びかかって食べちゃったかな。」

「この話は、子ネズミが食べられたら、悲惨というか、たぶん成り立たない。さっきから話に出ている『ほのぼの感』が失われて台なしだよ。」